

新入生のみなさんへのメッセージ



本書は、大学に入学したみなさんがより高い学修成果を挙げ、充実した大学生活を送るための基礎となる「大学での学び方」を習得するために編集されたテキストです。

大学では、出席してさえいればさまざまな能力が身につくわけではありません。講義を聴く際、ただただぼんやりと板書を書き写すだけの人と、参考文献を読んで自分なりの考えをもって臨んでいる人とでは、得られる成果はまったく違ったものになるでしょう。また、効果的な情報検索の仕方やわかりやすい話し方のコツをすでに身につけている人はより高いレベルをめざすことができますが、大学入学以前にそれらを身につける機会がなかった人は、自ら努力しなければ、追いつくことも追い越すこともできません。高い能力を身につけられるかどうかは自分次第です。

大学では、卒業後の進路を考えることも必要です。入学時から明確な目標をもっている人ももちろんいます。ですが、就きたい職業のイメージはあっても、それが大学での学びの延長線上にあると意識している人は多くないかもしれません。また、周囲に流されて何となく進学してくる人も徐々に増えています。具体的な進路をイメージしている人もそうでない人も、大学生活を通じて「これから自分はどう生きていくか」を考えることになるでしょう。そうした考えを深めていくためにも、「大学での学び方」をきちんと身につけておくことが必要になります。

「考える」というのはただ何となくすることではなく、より効果的にするための作法や技術があるからです。大学入学後の早い段階でそれらを身につけ、できるだけ学ぶ楽しさを味わってほしいと願っています。

執筆者紹介

(執筆順, *は編者)

* 伊藤 奈賀子 (いとう ながこ)

第 1, 2 章, Column ①

鹿兒島大学 学術研究院 学内共同教育研究学域 学内共同教育研究学系 准教授

主著：「学士課程における日本語リテラシー教育の開発」名古屋大学博士論文，2010年，「アクティブ・ラーニング導入の組織的課題」『鹿兒島大学教育センター年報』11，2014年。

藤内 哲也 (とうない てつや)

第 3 章

鹿兒島大学 学術研究院 法文教育学域 法文学系 教授

主著：『近世ヴェネツィアの権力と社会——「平穩なる共和国」の虚像と実像』昭和堂，2005年，『イタリア都市社会史入門——12世紀から16世紀まで』（共編著）昭和堂，2008年。

中島 祥子 (なかじま さちこ)

第 4 章

鹿兒島大学 学術研究院 法文教育学域 教育学系 准教授

主著：『かごしまカレッジ教育 日本語リテラシー レポートと話し合いのための日本語表現法』（分担執筆）戦略的の大学連携支援事業事務局，2010年，「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び——留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから」『鹿兒島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学篇』65，2014年。

近藤 和敬 (こんどう かずのり)

第 5 章

鹿兒島大学 学術研究院 法文教育学域 法文学系 准教授

主著：『構造と生成 I ——ガヴァイエス研究』月曜社，2011年，『数学的経験の哲学——エピステモロジーの冒険』青土社，2013年。

原 隆幸 (はら たかゆき)

第 6 章

鹿兒島大学 学術研究院 学内共同教育研究学域 学内共同教育研究系 准教授

主著：『言語と貧困——負の連鎖の中で生きる世界の言語的マイノリティ』（松原好次・山本忠行編，分担執筆）明石書店，2012年，『言語と格差——差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』（共編著）明石書店，2015年。

出口 英樹 (でぐち ひでき)

第7章, Column ②, ③

鹿児島大学 かごしま COC センター 特任准教授

主著：『教育基本法から見る日本の教育と制度——改正教育基本法で何が変わるか』（清原正義ほか編著，分担執筆）協同出版，2008年，『大学政策論』（岩崎保道編，分担執筆）大学教育出版，2011年。

* 富原 一哉 (とみはら かずや)

第8章, 13章

鹿児島大学 学術研究院 法文教育学域 法文学系 教授・教育センター 副センター長

主著：『脳とホルモンの行動学——行動神経内分泌学への招待』（共編著）西村書店，2010年，『発達科学ハンドブック1 発達心理学と隣接領域の理論・方法論』（日本発達心理学会編，分担執筆）新曜社，2013年。

坂巻 祥孝 (さかまき よしたか)

第9章, Column ④

鹿児島大学 学術研究院 農水産獣医学域 農学系 准教授

主著：『日本産蛾類標準図鑑Ⅲ』（共編著）学研教育出版，2013年。

小野 智司 (おの さとし)

第10章, Column ⑤

鹿児島大学 学術研究院 理工学域 工学系 准教授

主著：「知識処理における事例ベース推論とその応用に関する研究」筑波大学博士論文，2002年，“User-System Cooperative Evolutionary Computation for both Quantitative and Qualitative Objective Optimization in Image Processing Filter Design,” *Applied Soft Computing*, Elsevier, 2014年。

下木戸 隆司 (しもきど たかし)

第11章

鹿児島大学 学術研究院 法文教育学域 教育学系 准教授

廣瀬 真琴 (ひろせ まこと)

第12章

鹿児島大学 学術研究院 法文教育学域 教育学系 准教授

主著：「児童の自己評価能力の育成方法に関する実証的研究」大阪市立大学博士論文，2007年，「自主的な学校行事を通じた生徒の成長に関する事例研究」（共著）『カリキュラム研究』19, 2010年。

目 次



第 1 章

授業の進め方と本書の位置づけ 1

- 1 目標を立てる 6
- 2 他者と協力して活動する 9
- 3 本章のまとめ 11

第 2 章

メモを取る 13

- 1 授 業 15
- 2 本章のまとめ 20
- 3 事後学習 21
- 4 発展的学習 22
- Column ① 初年次教育 23

第 3 章

テーマの考え方・決め方 25

- 1 事前学習 27
- 2 授 業 30
- 3 本章のまとめ 34

4 事後学習	35
5 発展的学習	36

第 4 章

図書館活用法 ● 資料検索・資料収集 37

1 事前学習	39
2 授業	42
3 本章のまとめ	48
4 事後学習	49
5 発展的学習	50

第 5 章

文章の読み方 51

1 事前学習	53
2 授業	55
3 本章のまとめ	61
4 事後学習	62
5 発展的学習	63
Column ② 単位制度	64

第 6 章

プレゼンテーションの構成や引用規則、参考文献の示し方 67

1 事前学習	69
--------------	----

2 授 業	71
3 本章のまとめ	77
4 事後学習	78
5 発展的学習	79

第 7 章

発表の聴き方，質問の仕方 81

1 事前学習	83
2 授 業	85
3 本章のまとめ	92
4 事後学習	93
5 発展的学習	94
Column ③ キャリア教育	95

第 8 章

テーマと活動の見直し 97

1 事前学習	99
2 授 業	102
3 本章のまとめ	110
4 事後学習	111
5 発展的学習	112

第 9 章

調査・分析結果のまとめ方 113

1 事前学習	115
2 授業	116
3 本章のまとめ	124
4 事後学習	124
5 発展的学習	125
Column ④ 資料過多による弊害	127

第 10 章

プレゼンテーションの要点①

● スライド資料の作り方 129

1 事前学習	131
2 授業	141
3 本章のまとめ	143
4 事後学習	143
5 発展的学習	144
Column ⑤ 発表の最初に、結論を 一言で伝えよう	145

第 11 章

プレゼンテーションの要点② ● 話し方 147

1 事前学習	149
2 授業	152
3 本章のまとめ	155
4 事後学習	159
5 発展的学習	161

第 12 章

プレゼンテーションの要点③ ● 効果的な質疑応答 167

1 事前学習	169
2 授 業	171
3 本章のまとめ	178
4 事後学習	179
5 発展的学習	180

第 13 章

まとめ ● さらなる学びのために 181

1 事前学習	183
2 授 業	186
3 本章のまとめ	190
4 事後学習	191
5 発展的学習	192

資 料 ————— 193

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第 1 章

授業の進め方と本書の位置づけ





本書のコンセプト

「アクティブ・ラーニング」という用語を耳にしたことがありますか。能動的学習、あるいは主体的学習等と訳されるこの用語は、このところわが国の大学教育改革に関する議論のなかで頻繁に用いられており、最近では小学校・中学校・高校での教育をも含めた、わが国の教育全体に関わるきわめて重要なキーワードとなっています。

では、「アクティブ・ラーニング」とはいったいどのようなものなのでしょう。通常、「アクティブ・ラーニング」というと、学生が話したり、書いたり、周囲から見て活発に活動している授業をイメージする人が多いようです。しかし、アクティブ・ラーニングで重要なのは、学習者の頭のなかで活発に動いていることです。見た目にアクティブであることを意味しているわけではありません。何も言わず身動きもしていない状態でも、頭のなかで必死に考えていることはめずらしくありません。逆に、活発に動いているように見えても、言われたことを機械的にしているだけで自分の頭では何も考えていない場合もあります。考えながら学習できているかどうかこそが、アクティブ・ラーニングか否かの境界線なのです。グループ活動やプレゼンテーション（発表）といった学習活動は、考えたことを表現するための機会として設定されているにすぎません。グループで話し合えばそれでアクティブ・ラーニングになるというものではありませんし、プレゼンテーションは考えながら練り上げてきた成果を発表するための場です。

アクティブ・ラーニングがこれほどまでに重視されるのは、大学教育の重点が「教員が何を教えたか」から「学生が何を身につけたか」、つまり、どのような学習成果があったかに移行したことによります。大学では、授業をただ聴いているだけで知識や能力が身につくわけではありません。学生自身が能力向上を目的として自律的に学習に取り組むことが重要です。その際、授業がアクティブ・ラーニングを促すように計画されていれば、

学生は自然と自律的に学習を行うほうへと進んでいけるでしょう。それが、入学から比較的早期の段階であれば、大学での基本的な学び方を早い段階で身につけることにもつながります。本書および本書を用いた授業がアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れているのは、そうした背景によるものです。

頭のなかをアクティブにして学習に取り組むには、授業の前後も含めた時間の使い方がとても大切になります。テキストをもって教室に行って授業をただぼんやりと聞くのではなく、テキストに基づいて予習をして疑問点を挙げておいたり、授業内で発言したり質問したりできるように事前の準備をしておきましょう。

本書では、各章に予習のための「事前課題」のほか、復習用の「事後課題」、いっそう学習を深めたい人のための「発展的課題」が示されています。また、「参考文献」も挙げられているので、授業時間外に自主学習を進めやすくなっています。前回の学習内容についての「事後課題」や「発展的課題」、そして、今回の学習内容についての「事前課題」に取り組んで、自分の知識や能力が不十分な点を自覚したうえで、より高い学習成果を得られるよう、積極的な態度で授業に臨みましょう。



本書の使い方

本書は、1つひとつの章が各回の授業に対応するようまとめられています。各章のテーマについて学ぶことを通して大学での学び方を習得し、最終的に、特定の問題について調べ、学習したことを効果的なプレゼンテーションとして表現できるようになることを目的として編纂されています。対応する授業回と章の例は次ページの表のとおりです。ただし、各章は独立しているので、特に関心の高い章から自分で読み始めてもかまいません。

また、各章にはそれぞれ「事前学習」「事後学習」「発展的学習」「参考文献」が記載されています。「事前学習」は授業の予習として行うもの、「事

	テーマ	本書の 該当章
第1回	オリエンテーション, メモの取り方を理解する	第1, 2章
第2回	テーマの考え方・決め方を学び, 仮テーマを決める	第3章
第3回	資料検索・収集のための図書館活用法を学ぶ	第4章
第4回	文章の読み方を学ぶ	第5章
第5回	プレゼンテーションの構成や引用規則, 参考文献の示し方を理解する	第6章
第6回	発表の聴き方, 質問の仕方を学ぶ	第7章
第7回	中間プレゼンテーション	
第8回	中間発表を振り返り, テーマを再検討する	第8章
第9回	調査・分析, 結果のまとめ方を学ぶ	第9章
第10回	プレゼンテーション資料の作り方を学ぶ	第10章
第11回	プレゼンテーションでの話し方を学ぶ	第11章
第12回	効果的な質疑応答の仕方を学ぶ	第12章
第13回	最終プレゼンテーション①	
第14回	最終プレゼンテーション②	
第15回	授業全体を振り返り, 今後の学習方針を立てる	第13章

後学習」は復習として行うものです。これらの学習活動を行うことを前提に本書は作成されていますので、忘れずに取り組んでください。「発展的学習」はより意欲的に学びたい人向けの課題です。また、「参考文献」も同様に、本書の内容以上に学びをより深めたい人に勧めるものです。指示されたことをただやるのではなく、自ら進んで積極的に学習を進めていってください。

また、本書はPBLを前提としています。ここでのPBLとはProject Based Learning または Problem Based Learning の略であり、日本語

では「課題解決型学習」などと訳されます。教員から示された課題の解決に向けて学生が自主的に取り組み、その過程を通じて論理的思考力や情報を整理する能力等を向上させることをめざした学習方法です。その起源は、1960～70年代の北米の医学教育とされており、医学の進歩が急速に進むなかで、従来型の講義では必要な能力を習得することが困難になったことを背景として提案されてきました。昨今、わが国の大学でも普及が進んでいるのも、これと同様の背景によるものといえるでしょう。

1

目標を立てる



(1) 大学での学び方

みなさんが大学に進学しようと考えた理由はどのようなものでしょうか。文部科学省が毎年実施している「学校基本調査」によれば、わが国では現在、大学進学率が50%を超えています。1970年代には20～30%でしたが、その後急速に増加し、いまでは大学進学は必ずしもめずらしいことではなくなりました。その結果、周囲に流されて何となく進学する学生が増え、進学率が低かった頃にはなかった新たな問題が生じています。

先ほど触れたように、大学では自ら学ぼうとしなければ能力は身につけません。本書では事前課題や事後課題、発展的課題等が非常に丁寧に示されていますが、これは、みなさんが大学での学び方に慣れるために必要だと考えているためです。大学でみなさんが受ける講義では具体的な宿題が出されるとは限りませんが、だからといってそれが、授業時間以外には何もしなくていいということの意味するものではありません。自発的に考えたり、本や論文を読んだりしたうえで授業に臨むことが暗黙裡^{あんもくり}に期待されているのです。

大学で学びたいことや身につけたいことがはっきりしている人は、すぐにもそうした自主学習を進めていけるかもしれませんが、全員がそうできるわけではないでしょう。本書を活用することで、大学では授業の前後に自律的に学習をする必要があるということ、それにはどのような方法があるかということを理解してください。

(2) 目標を立てる

「自分是人前で話すのが上手じゃない……」「国語が苦手で、うまく文章が書けない……」といったさまざまな問題を誰しも何かしらもっているでしょう。

だからといって、努力したらすぐに話すのが上手になるか、作文が得意になるかという、そんなにうまくはいきません。そもそも、どのような状態が「話すのが上手」「文章がうまい」といえるのかという、人によって少しずつ認識が異なるのではないのでしょうか。たとえば、言葉はすらすらと出てくるけれども、よく聴くと何が言いたいのかよくわからない人と、ポツリポツリとしか言葉は出てこないけれどもとても重要なことを指摘してくれる人とを比べてみてください。

ただ話すのが上手になりたいと願うだけでなく、どのように話せるようになりたいのかを具体的にイメージすることが必要です。目標が具体的になって初めて、目標達成に向けた学習方法も定まってくるのです。

そこで、いま一度、自分の目標について考えてみましょう。そのうえで、自分にふさわしい学習方法はどのようなものかについて、再検討してみましょう。

- ① 本書の内容を通じて達成すべき目標は下記の3つです。これらについて、いまの自分はどの程度の水準にあると考えますか。
 - ✎ 自ら課題を発見し、その解決に向けて検索・収集した資料を分析・整理し、自分なりの考えをもつことができる。
 - ✎ グループ活動に積極的に参加し、協力して作業を進めることができる。
 - ✎ 調べた内容や自分の考えを、効果的に説明・発表できる。



- ② ①で示した目標について、それぞれ半年後にどの程度に高めたい／高められると思いますか。そう考えた理由も説明してください。



- ③ ①②をふまえ、自分にはいまでのような学習が必要だと思いますか。



- ④ ③で挙げた学習を実際に行う際の課題とはどのようなものだと思いますか。

例：何をどうすればいいのかわからない。

自分に厳しくできないので、ついサボってしまう気がする。



- ⑤ ④で挙げた課題を解決して目標を達成するには、具体的にどのような努力が必要ですか。



2

他者と協力して活動する



この授業では、グループでの活動が中心になります。人によって何が課題だと考えるかも異なれば、その解決方法についてもさまざまな見方がありえます。ですから、他者の考えに耳を傾け、互いを尊重し合いつつ最も適切な方法を模索していく過程は、この授業の核となる活動となります。

しかし、協力して活動を進める前提として、まずは個人が自分の責任をきちんと果たすことが必要です。「誰かがやってくれる」とみんなが思っていれば、課題は解決されるどころか、深刻な状況に陥りかねません。授業内での活動で

例えば、もし使うべき資料をもってこない人がいたら、その日の作業は予定どおりに進められません。その人だけが、作業の場で話し合いにうまく参加できないでしょうし、無断で欠席すればなおさらです。かといって、作業を行ったうえで出席したとしても、話し合いの場でまったく発言せず座っているだけでは、これも問題です。

もちろん、自分の意見を言うのが苦手だったり、緊張してしまって言葉が出てくるのに時間がかかったりすることはあるでしょう。しかし、グループで活動する以上、話し合いには何らかの形で貢献する必要があります。たくさん意見を言うのが苦手であれば進んで書記係を務めるなど、その人なりの貢献の仕方があるでしょう。みんながまったく同じ方法で活動をしなければならないわけではありません。

重要なのは、それぞれがそれぞれの責任をきちんと果たすことです。グループ活動に限らず、私たちは他者との関わりのなかで生きています。自分の何気ない言動が他者に迷惑をかけたり、不快にさせたりするかもしれません。自分のすることが他者にどう受け止められるか、どんな影響を与えるかについての想像力を持ち、他者に対する思いやりを豊かにすることは、社会を生きる個人として成長していくうえでとても大切なのです。あなたの態度があなた自身と学友の学びの成果に直結するという自覚をもつことが大切です。

(1) アイスブレイク

初対面の人ばかりが相手では緊張してしまいますよね。まずは、空気をほぐすために、自己紹介をしましょう。その際に、所属や氏名だけでなく、次の質問に対する答えを一言つけ加えましょう。さらに「こんなことが知りたい!」というアイデアがあれば、つけ加えてください。

なお、ほかの人の名前を覚えるためにメモを取っておきましょう。このメモは、第2章の学習に用います。

- ✎ 大学生の間にやりたいこと
- ✎ いま、気になって仕方ないこと
- ✎ すごく困っているけれど、誰に尋ねればいいのかわからないこと



(2) グループ名をつける

この授業では、このグループで活動を進めていきます。意見を出し合って、グループ名をつけてください。



3

本章のまとめ



自分を成長させたいと考えたら、まずは具体的な目標を立ててみましょう。著名な企業家を見て、「あの人のように話せるようになりたい」「どうしたらあんなにすごいプレゼンテーションができるんだろう」などと感じることは誰しもあるでしょう。しかし、そう思うだけではそうした人々には近づけません。自分自身を冷静に振り返り、何をすべきかを考え、目標を立てる必要があります

ます。「ぼんやりしているうちに、突然プレゼンテーションが上手になった！」などという奇跡は起こりません。

目標を立て、その達成に向けて努力をしていくことは、もともと個人的な活動です。しかし、その過程ではさまざまな人と関わります。自分の目標達成のために努力することは大切ですが、それが共に学ぶ、あるいは共に行動する他者の妨げになってはいけません。

他者と協力し合いながら物事に取り組み、解決していく能力も、社会を生きていくうえでとても重要です。この授業でのグループ活動は、そうした能力を高めていくための機会でもあります。自分自身の特徴をよく理解し、どうしたら自分の能力を高めつつ、グループにも貢献できるかを常に考えながら行動していく習慣を身につけましょう。



参考文献

- (1) 藤田哲也編 (2006) 『大学基礎講座——充実した大学生活をおくるために〔改増版〕』 北大路書房
- (2) 玄田有史 (2010) 『希望のつくり方』 岩波新書
- (3) 苅谷剛彦・西研 (2005) 『考えあう技術——教育と社会を哲学する』 ちくま新書
- (4) 奥村隆 (1998) 『他者という技法——コミュニケーションの社会学』 日本評論社



大学での学びをアクティブにする
アカデミック・スキル入門
*Academic Skills: Start up for Active
Learning in Higher Education*

〈有斐閣ブックス〉

2016年3月20日 初版第1刷発行
2017年2月20日 初版第2刷発行

編者 伊藤奈賀子
富原一哉
発行者 江草貞治
発行所 株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電話 (03) 3264-1315 [編集]
(03) 3265-6811 [営業]
郵便番号 101-0051
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷 株式会社理想社
製本 大口製本印刷株式会社
組版 田中あゆみ

©2016, Nagako Ito, Kazuya Tomihara. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-641-18430-5

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。